

韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の 書き取りに関する研究

—学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響—

宮岡 弥生
(広島経済大学)

玉岡 賀津雄
(名古屋大学)

林 炫情
(山口県立大学)

池 映任
(東京大学・日本学術振興会外国人特別研究員)

キーワード

漢字, 韓国語母語話者, 日本語学習者, 語彙使用頻度, 音韻的類似性

要旨

日本語と韓国語はともに漢字文化圏にあるといわれているが、現在、韓国ではハングル専用が完成されており、日常生活で漢字が用いられることは少ない。そのため、韓国語母語話者は、漢字の音韻的表象は持っているが書字的表象は持っていないと考えられる。そこで本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者がどのような漢字想起と書字のメカニズムを用いているのかを明らかにするために、漢字二字熟語の書き取りテストを実施し、漢字二字熟語の記憶に対する①語彙使用頻度、②学習者の日本語能力の高低、③日本語と韓国語の語彙の音韻的類似性の影響を検討した。分析の結果、①漢字二字熟語の記憶に対する語彙使用頻度の影響が見られた。このことから、韓国語を母語とする日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、日本語の漢字二字熟語を一字単位ではなく二字単位で捉えて記憶している可能性があると考えられる。②学習者の日本語能力については、語彙力の高いグループのほうが、低使用頻度語彙の記憶において特に優れていた。③音韻的類似性は、漢字二字熟語の記憶に対する影響が見られなかった。

1. はじめに

漢字は、形(字体)・音(発音)・義(意味)の三要素で構成されており、その一字一字が語(word)をあらわすという「一字一語」の原則につらぬかれた文字である(大島2006)と言われている。しかし、日本語において、本当に一漢字が一語という機能を果たしているのかという意見もある(田島2006)。たとえば、『論語』の語彙調査における中国人研究者と日本人研究者との調査比較(陳2001)によると、中国では一字語の占める割合が74.9%で二字語が24.9%であるのに対して、日本では一字語は35.6%にすぎず、二字語が54.8%も占めていたということである。つまり、同じ文献を扱いながら、一字語、二字語の把握の仕方の割合が日本と中国とでは逆転しているのである(田島2006)。このように、日本語では二字の漢字によって一語を示す(田島2006)傾向がある。言い換えれば、熟字表記においては、漢字一字一字が形態素を示しているのではな

く、熟字の形で語を表示するという機能を担っているのである（田島 2006）。実際、日本語の語彙の中で漢字二字熟語の占める割合は高く、日本語の国語辞典に掲載された語彙の約 70% が漢字二字熟語である（Yokosawa & Umeda 1988）。以上のことから、日本語母語話者は漢字を一字ずつではなく、二字熟語の単位で記憶していると考えられる。

2. 漢字文化圏と韓国語

それでは、数多くの中国語の漢語を有する韓国語を母語とする日本語学習者の場合は、漢字二字熟語を一字単位と二字単位のどちらで捉えて記憶しているのだろうか。韓国語は、文の構造や形態構造、語彙などが日本語とよく似ていると言われている（森下・池 1989）。また、韓国はもともと、日本と同様に漢字文化圏にあった。日本においてそうであったように、韓国においても、固有の文字を持たなかった時代には、漢字は韓国語を表記する唯一の手段であったのである（宋 2004）。そのため、漢語由来の語彙は韓国語にも存在し、韓国語の単語の 70% が漢語であるという事実もある（宋 2004）。たとえば、日本語の「安心」は同じ意味で韓国語にも存在する。現在の韓国語では通常、漢字の「安心」ではなくハングルの「안심」を用いるが、発音は日本語と非常によく似ており、日本語の音素表記が「aN siN」であるのに対して韓国語は「an sim」と、ほぼ同じ発音である。このように、日本語と韓国語には、同じ意味を持ち、しかも発音の類似した語彙が共通して存在している。

多くの共通点を持つ日本語と韓国語であるが、両者を大きく分かつ点は、実は、同じ漢字文化圏にありながら、日本語は漢字を表記形態として広く使用しているのに対して、韓国語は現在ではほとんど漢字を使用していないという点である。現在、すでに韓国では一般社会におけるハングル専用がほぼ完成され、漢字の渡来より 1500 年以上続いた表記としての漢字の役割は終焉を告げている（宋 2004）。現在の韓国人の漢字読み書き能力について、全国 49 の大学の 61 学科の卒業生 100 人を対象に行った調査（金 1997）によると、韓国の漢字能力検定試験 4 級の問題集を用いて試験を行った結果、100 点満点で平均が 29.5 点であった。この韓国の漢字能力検定試験 4 級では、漢字 1 千字の音と訓を読む能力と、500 字を書く能力が要求され、70 点以上を合格としている（宋 2004）。この調査では、漢字を読む能力と書く能力の両方を測定しているが、これを書く能力のみに絞ってみると、ハングルで書かれた漢語を漢字表記にする問題では、10 問のうち正解率は文字数で 0.82 字という低さであった。実際、韓国の学校教育において、現在では日本ほど漢字教育は行われておらず、自分の名前を漢字で書けない若者も多い。この調査からすでに 10 年が経過していることを考慮に入れると、現在では韓国でのハングル専用はますます進み、若い世代の漢字運用能力はさらに低くなっていることが予想される。

3. 本研究の目的

以上のように韓国語は、文法的に日本語との類似性が高く、日本語と同じ漢字文化圏にあり母語の中に漢語由来の語彙を数多く持っているにもかかわらず、日本語とは異なり、現在では漢字を表記形態として使用することがほとんどないという特徴をもっている。このことを認知心理学

的に言い換えれば、漢語の語彙は音聲的に存在している（漢語の音韻的表象群が存在する）ものの、それらはハングルで表記されるために韓国語母語話者は漢字表記で記憶してはならず（漢語の漢字表記での書字的表象は存在せず）、漢語の発音がわかったとしても、それがすぐに漢字に置き換えられることはない（音韻的表象から韓国語の漢字の書字的表象が活性化されることはない）ということになる。つまり、韓国語母語話者が日本語を学習する場合には、目標言語である日本語を通して漢字の書字的表象群が形成される可能性があると言えるであろう。

日本語母語話者に対して漢字二字熟語を音声提示した書字行動の実験（玉岡・高橋 1999）では、語彙使用頻度の高い漢字二字熟語の方が、語彙使用頻度の低い漢字二字熟語よりも想起時間（音声提示から漢字を書き始めるまでの所要時間）が短いことが証明されている。さらに、語彙使用頻度の高い漢字二字熟語の方が語彙使用頻度の低い場合よりも、一つ目の漢字の書字時間が短いことも、同研究で観察された。これらの結果は、語彙使用頻度が高い漢字二字熟語は、想起された際のイメージが強く（書字的表象の活性化が強く）、漢字が一字単位ではなく語彙の一部として記憶されていることを示している。この研究では、たとえば、新聞での語彙使用頻度（国立国語研究所 1973）が 2008 回の「消化」に含まれた場合の「消」の漢字と、435 回の「消失」に含まれた同じ「消」の漢字を書く場合とを比べると、語彙使用頻度の高い「消化」に含まれた「消」の漢字の方が「消失」に含まれた「消」よりも想起にかかる時間が短く、書字行動が早く始まることが明らかになった。つまり、漢字二字熟語に含まれる漢字は、まず単語のレベルで想起されて、その後に関々の漢字の書字的なイメージが浮かんでくるというのが、多くの場合の日本語母語話者の想起過程となっていると言えるであろう。

では、漢字二字熟語の音韻的表象群は持っているものの、書字的表象群は持っていないと考えられる韓国語母語話者は、どのような漢字想起と書字のメカニズムを用いているのであろうか。本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者に対して漢字二字熟語の書き取りテストを実施し、漢字二字熟語の書字に対する①語彙使用頻度、②学習者の日本語能力の高低、③日本語と韓国語の語彙の音韻的類似性の影響を検討することにした。

4. テストの概要

4.1. 漢字二字熟語の選択と仮説

本研究で分析の対象とする漢字は、「行」、「安」、「囧」のような日本語の常用漢字で、日本語能力試験の配当級が 2 級から 4 級までの比較的簡単なものである。前述のように、韓国語を母語とする日本語学習者の漢字の記憶に影響を及ぼす要因の一つとして、語彙使用頻度を想定した。つまり、同じ漢字であっても、語彙使用頻度の高い漢字二字熟語の中にある場合にはターゲットの漢字の正答率が高く、使用頻度の低い熟語の場合には正答率が低いと考えられるのである。例えば、日本語能力試験 4 級配当の「行」という漢字は、日本語能力試験 3 級配当の「旅」と結合して「旅行」となることもあれば、同じく 3 級配当の「歩」と結合した場合には「歩行」となる。しかし、これら 2 つの漢字二字熟語の使用頻度は、朝日新聞の 1985 年から 1998 年までの 14 年分の記事データをもとに作成したデータベース『日本語の語彙特性』（天野・近藤 2003）による

と、「旅行」が20,593で、「歩行」が867と、大きく異なっている。つまり、漢字二字熟語としての「旅行」と「歩行」は、日本語学習者にとって漢字一字ずつの日本語能力試験配当級は同じであるが、熟語となった場合の使用頻度が大きく異なっていると言える。また、これらの熟語は、読み方も、それぞれの音読みの「旅(リョ)」「歩(ホ)」「行(コウ)」を結合して「旅行(リョコウ)」「歩行(ホコウ)」となっているだけである。したがって、日本語学習者が「リョコウ」や「ホコウ」といった読み方から熟語の漢字を想起する場合、仮に熟語を漢字一字の単位で想起するなら、日本語能力試験の配当級が同じ「旅」と「歩」に同じ漢字「行」が接続している「旅行」と「歩行」は、正答率に差はないはずである。しかし仮に、この二つの漢字二字熟語において、ターゲットとなっている「行」の漢字の書字の正答率が異なるならば、語彙としての使用頻度が漢字の想起に影響している可能性があると言えるであろう。

4.2. 漢字二字熟語およびターゲット漢字の統制

一つの漢字に対して異なる二つの漢字を結合させて2種類の二字熟語を作り、その2種類の漢字二字熟語の使用頻度が高低2グループに分かれるようにターゲットの漢字を選択した。さらに、語彙使用頻度の高低で2つに分けたグループを、それぞれ二つ目(右側)の漢字を変えるものと一つ目(左側)の漢字を変えるものの2つに分けた。以上のようにして選択した漢字二字熟語は、高使用頻度が24個、低使用頻度が24個の計48個である。その他の統制条件は、日本語と韓国語の音韻的類似性、漢字二字熟語を構成する個々の漢字の画数、および日本語能力試験配当級である。語彙使用頻度(天野・近藤2003による)、個々の漢字の画数、日本語能力試験配当級については表1に、日韓音韻的類似性については表2に示した。音韻的類似性の算出方法については、後述する。表1に網掛けで示したターゲット漢字については、語彙使用頻度の高低2グループで同じものを使用した。漢字二字熟語に含まれるターゲットの漢字の左右の位置についても、半分ずつ同じ数になるようにした。その上で、同じターゲットの漢字を含む漢字二字熟語について、語彙使用頻度の高低を設定した。語彙使用頻度の高い24種類は、語彙使用頻度の平均が12,423(標準偏差が16,642)である。それに対して、語彙使用頻度の低い24種類は430(標準偏差が259)と低く設定した。両者を独立したサンプルの*t*検定で比較した結果、高低の語彙使用頻度に有意な違いがみられた [$t(46)=3.455, p<.01$]。これは、本研究の実験条件である。

さらに、ターゲットの漢字と結合するもう一つの漢字の特性が同じになるように統制した。まず、画数が、語彙使用頻度の高い場合の平均が8.46画(標準偏差が3.04画)、語彙使用頻度が低い場合の平均が8.88画(標準偏差が3.66画)で、両者に有意な違いはなかった [$t(46)=-0.429, n.s.$]。同様に、ターゲットの漢字と結合するもう一つの漢字の日本語能力テストの出題基準の級を、語彙使用頻度の高低で完全に同じになるようにペアで統制した。したがって、出題級は語彙使用頻度の高い場合も低い場合も同じで、平均が2.58級(標準偏差が0.65級)となり、当然、*t*検定の結果は有意ではない [$t(46)=0.000, n.s.$]。

以上のように、画数と出題級が同等である2種類の漢字が、同じ漢字と結合した場合に、語彙使用頻度が2つのグループで大きく異なるように漢字二字熟語を選んだ。

表1 漢字テストで問題にした漢字二字熟語

高使用頻度の漢字二字熟語						低使用頻度の漢字二字熟語					
熟語	語彙使用頻度	漢字1	漢字2	画数	日本語能力テスト配当級	熟語	語彙使用頻度	漢字1	漢字2	画数	日本語能力テスト配当級
出発	12796	出	発	5	4	出社	688	出	社	7	3
急死	1225	急	死	9	3	急病	286	急	病	10	3
食事	11003	食	事	9	4	食通	67	食	通	10	3
映画	37275	映	画	9	3	映写	169	映	写	5	3
安心	7039	安	心	6	3	安住	558	安	住	7	3
試作	1195	試	作	13	3	試用	71	試	用	5	3
採算	4301	採	算	11	2	採集	761	採	集	12	2
吸入	5358	吸	入	6	2	吸引	377	吸	引	4	2
危険	14254	危	険	6	2	危害	595	危	害	10	2
簡単	4154	簡	単	18	2	簡便	107	簡	便	9	2
血液	5675	血	液	6	2	血清	359	血	清	11	2
消化	2008	消	化	10	2	消失	435	消	失	5	2
地図	5152	地	図	6	3	海図	226	海	図	7	3
上空	4768	上	空	3	4	天空	177	天	空	8	3
年金	17181	年	金	6	4	入金	923	入	金	8	4
教室	10533	教	室	11	3	洋室	69	洋	室	9	3
医学	5820	医	学	8	4	勉学	360	勉	学	8	4
旅行	20593	旅	行	10	3	歩行	867	歩	行	6	4
原因	34289	原	因	10	2	敗因	861	敗	因	6	2
苦痛	2340	苦	痛	8	2	腹痛	651	腹	痛	12	2
残念	4577	残	念	10	2	無念	475	無	念	8	2
情報	78459	情	報	11	2	誤報	430	誤	報	12	2
演劇	6887	演	劇	14	2	観劇	339	観	劇	15	2
盗難	1260	盗	難	11	2	受難	476	受	難	18	2

注1: 網掛け部分の漢字はターゲットの漢字であることを示す。

注2: 「漢字1」は漢字二字熟語の左側の漢字であることを、「漢字2」は右側の漢字であることを示す。

テストの形式は、分析の対象とする漢字二字熟語を含む短文をすべてひらがなで提示し、下線部の単語を漢字で書いてもらうというものである。例えば、「わたしは あした ひこうきでとうきょうに(しゅっぱつ)する。」のように、文節の切れ目が分かるように問題文を提示した。文をすべてひらがなで表記したのは、ターゲットの漢字二字熟語以外の漢字がターゲットの漢字の書き取りに影響しないようにするためである。漢字の書き取りの得点は、ターゲットになっている漢字(表1で網掛けで示されている漢字)が正しく書けた場合に1点とした。ターゲットの漢字は語彙使用頻度の高低グループで各24字であるため、それぞれ0点から24点までのデータとなる。

4.3. 被験者

本研究の対象は、大学の日本語学科において1~2年間日本語を学習している韓国在住の韓国語母語話者70名(男性13名、女性57名)である。月齢は、最年少が237ヶ月、最年長が458ヶ月で、月齢の平均は268ヶ月であった。

漢字テストと併せて、日本語の語彙力を測定するために25点満点の語彙テストを実施した。語彙テストは、和語、漢語、外来語、機能語が各12問で、計48問である。これらはそれぞれ、同数の名詞、形容詞、動詞で構成されている。問題の形式は、文中の空欄に入れるのに最も適切なものを4つの選択肢の中から選ぶというものである。例えば、「彼女はどんなに大変なときでも、()ひとつ言わずに病人の世話をしている。」の空欄に入れる語を、「語句」「苦難」「不評」「愚痴」の4つの選択肢の中から選ぶという形式である。この語彙テストについて、1問1点で採点したところ、最低点が3点で最高点が24点、全体の平均点が13.89点、標準偏差が4.58点であった。また、歪度は0.117であったが、正規分布して左右対称である場合に0となるため、本研究ではほぼ左右対称の分布であることが分かる。また、尖度は-0.085である。正規分布の尖度は0で、尖度が正の場合、データの分布は正規分布よりもスソが長くなり、負の場合は正規分布よりも分布のスソが短くなる。本研究では、分布のスソが若干、正規分布より短くなっている程度である。この70名を、全体の平均点である14点以上をとった語彙力の高いグループ36名(平均:17.36点、標準偏差:3.02点)と、14点以下の語彙力の低いグループ34名(平均:10.21点、標準偏差:2.66点)の2つに分けた。両グループの間に有意な語彙力の差があった[$t(68) = -10.503, p < .001$]。

また、月齢は語彙力の高いグループが平均272ヶ月(標準偏差:30ヶ月)、低いグループが平均263ヶ月(標準偏差:42ヶ月)で、 t 検定の結果、両者の間に月齢の差はなかった[$t(68) = -1.053, n.s.$]。

5. 日本語の語彙力と語彙使用頻度に関する分析と考察

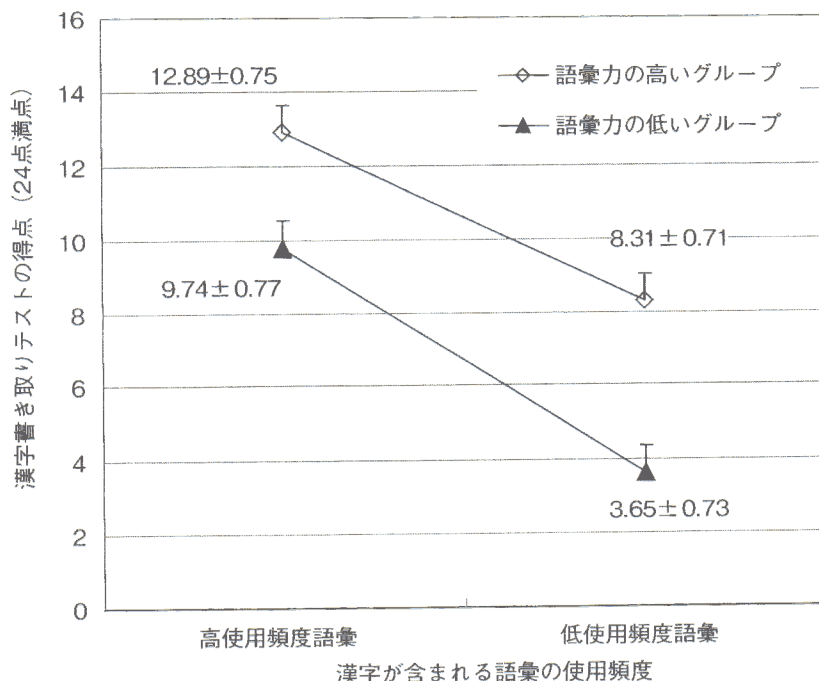
漢字テストの得点に対する漢字二字熟語の使用頻度の影響を調べるため、被験者の日本語語彙力が高いグループと低いグループについて分析を行った。漢字テストの得点の平均と標準誤差は図1の折れ線グラフとバーで、平均と標準偏差の値は数値で示した。

漢字の得点について、2（日本語語彙力の高低）×2（漢字二字熟語の語彙使用頻度の高低）の分散分析を行った。語彙使用頻度が反復測定である。

まず、漢字二字熟語の語彙使用頻度が有意な主効果を示した [$F(1,68)=306.713, p<.001$]。つまり、同じ漢字であっても、語彙使用頻度の高い二字熟語の中に含まれている場合のほうが、使用頻度の低い二字熟語の中に含まれている場合よりも、容易に想起されるということである。この結果は、韓国語を母語とする日本語学習者が漢字二字熟語を読み方から想起する場合、漢字一字ずつの単位というよりも、漢字二字の熟語の単位で想起する傾向があることを示している。

また、学習者の日本語語彙力の主効果も有意であった [$F(1,68)=15.050, p<.001$]。したがって、学習者の日本語語彙力の違いが漢字の書き取りの得点の違いに強く影響していることが分かった。図1からも分かるように、語彙力の高い日本語学習者の方が語彙力の低い日本語学習者よりも、使用頻度の高い漢字二字熟語においては3.15点、使用頻度の低い漢字二字熟語においては4.66点も高かった。

さらに重要なことには、両者の交互作用も有意であった [$F(1,68)=6.099, p<.05$]。図1に示されているように、語彙力が高いグループも低いグループも、低使用頻度語彙の得点が低くなっていることに変わりはない。しかし、低使用頻度語彙と高使用頻度語彙の得点の差は、語彙力が高いグループのほうが小さくなっている。つまり、語彙力が高いグループは、低使用頻度語彙の習得において、語彙力の低いグループよりも特に優れていると言えるであろう。



注1：折れ線グラフのバーは標準誤差を示す。

注2：数値は平均と標準偏差（±の後の値）を示す。

図1 韓国語を母語とする日本語学習者による漢字書き取りテストの結果

6. 日韓の音韻的類似性に関する分析と考察

次に、韓国語を母語とする日本語学習者による漢字二字熟語の想起に、日本語と韓国語の音韻的類似性が影響しているかどうかについて分析を行った。日韓の音韻的類似性は表2に示した。

この音韻的類似性とは、漢字二字熟語の日本語と韓国語の音素表記をもとにした指標で、両者の音素表記中に含まれる共通の音素の数を、日本語の音素表記全体の音素の数で割ったものである。

例えば、日本語の「旅行」の音素表記は「ryo koR」で、韓国語の「旅行」は「yeo haeng」である。両者に共通している音素は「y」「o」の2つで、日本語の音素表記全体の音素は「r」「y」「o」「k」「o」「R」の6つである。したがって、2を6で割った0.33が日韓音韻的類似性指数となる。また、韓国語の「n」「m」「ng」の3つの音は、日本語では区別せずに撥音「N」として表記される。したがって、漢字二字熟語の「安心」は、日本語では「aN siN」、韓国語では「an sim」と音素表記されるが、本研究では「n」も「m」も「N」に相当するとみなし、音韻的類似性は「1」とした。この基準にもとづいて本研究で選択した漢字二字熟語について、日本語と韓国語の音韻的類似性を算出した結果、高使用頻度の漢字二字熟語24種類の日韓音韻的類似性指数は、平均が0.46で、標準偏差が0.26であった。一方、低使用頻度語彙24種類の日韓音韻的類似性指数は、平均が0.49で、標準偏差が0.23であった。両者の違いを*t*検定で検討した結果、高使用頻度語彙と低使用頻度語彙の間の音韻的類似性に違いはなかった [$t(46) = -0.438, n.s.$]。したがって、正答率に対する日韓の音韻的類似性の影響は、語彙使用頻度の高低各グループで同じであるといえる。

48種類の漢字二字熟語の日韓音韻的類似性指数の平均は、使用頻度の高いグループと低いグループを合わせた全体で0.478で、標準偏差は0.242である。また、それらに含まれるターゲットの漢字の書き取りの正答率は平均で0.362で、標準偏差は0.272である。これら二つの変数のピアソンの相関係数は $r(48) = .086, n.s.$ と低く、音韻的類似性と漢字の書き取りの正答率には有意な相関関係がないことが分かった。

したがって、本研究で使用した日本語の漢字二字熟語は、「残念」を除いて（類似性は無いので、0.00とした）母語である韓国語にすべて存在しているものの、韓国語を母語とする日本語学習者は、母語の韓国語の漢語を音韻的に想起して、そこから韓国語の漢字あるいは日本語の漢字を想起するという書き取りのプロセスは取っていないと考えられる。

7. 考察

本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者が発音から漢字二字熟語を想起する場合に、単語としての語彙使用頻度の影響が強くみられることが明らかになった。つまり、韓国語を母語とする日本語学習者は、漢字二字熟語を漢字一字ずつの単位ではなく、語彙の単位で想起する傾向があることが示唆された。さらに、語彙使用頻度の影響のみでなく、ある程度予想されたことではあるが、学習者の日本語能力の違いも漢字の書き取り能力に影響することが分かった。語彙力の高い日本語学習者は、使用頻度の低い語彙の漢字の書き取りにおいて、語彙力の低い学習者よ

表2 テストに使用した漢字二字熟語の日韓音韻的類似性

ターゲットの漢字	高使用頻度の漢字二字熟語に含まれた場合				低使用頻度の漢字二字熟語に含まれた場合			
	漢字表記 日本語	韓国語 ハングル表記	音素表記 日本語	日韓音韻的 類似性指数	漢字表記 日本語	韓国語 ハングル表記	音素表記 日本語	日韓音韻的 類似性指数
出	出發	출발	syuQ patu	0.25	出社	출사	syuQ sya	0.43
急	急死	급사	kyuR si	0.50	急病	급병	kyuR byoR	0.63
食	食事	식사	syoku zi	0.29	食通	식통	syoku tuR	0.38
映	映畫	영화	ei ga yeong hwa	0.25	映寫	영사	ei sya yeong sa	0.60
安	安心	안심	aN siN	1.00	安住	안주	aN zyuR	0.67
試	試作	시작	si saku	0.67	試用	시용	si yoR	0.80
採	採算	채산	sai saN	0.67	採集	채집	sai syuR	0.14
吸	吸收	흡수	kyuR syuR	0.38	吸引	흡인	kyuR iN	0.50
危	危險	위험	ki keN	0.60	危害	위해	ki gai	0.40
簡	簡單	간단	KaN taN	0.83	簡便	간편	kaN beN	0.83
血	血液	혈액	ketu eki	0.29	血清	혈청	keQ sei	0.33
消	消化	소화	syoR ka	0.50	消失	소실	syoR situ	0.50
図	地圖	지도	ti zu	0.25	海圖	해도	kai zu	0.20
空	上空	상공	zyoR kuR	0.00	天空	천공	teN kuR	0.33
金	年金	연금	neN kiN	0.33	入金	입금	nyuR kiN	0.14
室	教室	교실	kyoR situ	0.63	洋室	양실	yoR situ	0.43
学	醫學	의학	i gaku	0.60	勉學	면학	beN gaku	0.57
行	旅行	여행	ryo koR	0.33	步行	보행	ho koR	0.20
因	原因	원인	geN iN	0.60	敗因	패인	hai in	0.60
痛	苦痛	고통	ku tuR	0.20	腹痛	복통	huku tuR	0.29
念	殘念	—	zaN neN	0.00	無念	무념	mu neN	0.80
報	情報	정보	zyoR hoR	0.43	誤報	오보	go hoR	0.40
劇	演劇	연극	eN geki	0.83	觀劇	관극	kaN geki	1.00
難	盜難	도난	toR naN	0.67	受難	수난	zyu naN	0.67
		平均		0.46		平均		0.49

りも優れていた。これは、語彙力が高い日本語学習者は、語彙がどのような漢字の組み合わせで表記されるかを知っているということを示唆しているであろう。やはり、漢字の書き取りには語彙レベルの知識が重要であると考えられる。

また、韓国語の語彙には漢語由来のものが多いことから、母語の漢語の音韻的な知識が、漢字二字熟語の書き取りに影響するのではないかと思われた。しかし、分析の結果、日韓の音韻的類似性の影響は見られなかった。つまり、本研究の被験者である韓国語母語話者は漢語に由来する語であっても漢語としての書字的な知識はほとんど持っていない。このことは、韓国語ではハングルの専用化が完成されており、韓国語がすでに漢字文化圏にあるとは言えなくなっていることを示唆しているであろう。

引用文献

- 天野成昭・近藤公久 (2003) 『日本語の語彙特性』, 編者/NTT コミュニケーション科学基礎研究所, 監修/三省堂
- 大島正二 (2006) 『漢字伝来』 岩波書店
- 金鐘煥 (1997) 「大学 卒業生 漢字能力 調査」『어문연구』(語文研究) 通巻 95 号, 한국어문교육연구회 (韓国語文研究会)
- 国立国語研究所 (1973) 『電子計算機による新聞の語彙調査 (IV) —国立国語研究所報告 48—』 秀英出版
- 宋永彬 (2004) 「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』, 129-160, 朝倉書店
- 田島優 (2006) 「表語文字としての漢字」『朝倉漢字講座②漢字のはたらき』, 1-16, 朝倉書店
- 玉岡賀津雄・高橋登 (1999) 「漢字二字熟語の書字行動における語彙使用頻度および書字的複雑性の影響」『心理学研究』 70, 45-50, 日本心理学会
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院
- 森下喜一・池景來 (1989) 『日本語と韓国語の敬語』 白帝社
- Yokosawa, K. & Umeda, M (1988) *Processes in human kanji-word recognition. Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics*, 378-380. August 8-12, 1988, Beijing and Shenyang, China.

(投稿受理日: 2008 年 8 月 12 日)

(最終原稿受理日: 2008 年 12 月 25 日)

宮岡 弥生 (みやおか やよい)

広島経済大学経済学部教養教育部

731-0192 広島市安佐南区祇園五丁目 37 番 1 号

y.miya8411@hue.ac.jp

玉岡 賀津雄 (たまおか かつお)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
464-8601 名古屋市千種区不老町
ktamaoka@gc4.so-net.ne.jp

林 炫情 (いむ ひょんじょん)

山口県立大学国際文化学部
753-8502 山口県山口市桜島 3-2-1
hylim@yamaguchi-pu.ac.jp

池 映任 (ち よんいむ)

東京大学外国人特別研究員
113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学文学部
happyhime@hotmail.com

Kanji writing ability of native Korean speakers learning Japanese: Effects of lexical knowledge and word frequency

MIYAOKA Yayoi
Hiroshima University of Economics

TAMAOKA Katsuo
Nagoya University

LIM Hyunjung
Yamaguchi Prefectural University

CHI Youngim
The University of Tokyo . JSPS Postdoctoral
Research Fellow

Key words

kanji, native Korean speakers, Japanese learners, word frequency, phonological similarities

Abstract

Originally, the Korean and Japanese languages belonged to the Chinese character's sphere of influence. However, Chinese characters (or kanji) are no longer used in Korea. Therefore, while native Korean speakers have the phonological representation of kanji, they do not have representations of kanji script. On the other hand, kanji are commonly used in Japan. In order to investigate effects of native Korean speakers' ability to recall and write two-kanji compound words, the present study used a writing test to examine the influence of (1) word frequency, (2) Japanese proficiency and (3) phonological similarities between Korean and Japanese. Results showed that (1) word frequency had a significant influence on the ability to recall and write two-kanji compound words (2) participants with higher Japanese proficiency were superior to those with lower Japanese proficiency, especially in terms of low frequency words and (3) phonological similarities between Korean and Japanese had no influence. Previous studies of two-kanji compound words (e. g., Tamaoka & Takahashi, 1999) indicated that native Japanese speakers were likely to memorize kanji not as a single unit, but in a unit of two-kanji compounds. Similarly, native Korean speakers learning Japanese memorize and produce two-kanji compound words as a unit of two kanji, rather than as a unit of single kanji.